

談話における「呼びかけ」の意味

小林 美恵子

1. はじめに

小論では対称詞の「呼びかけ用法」⁽¹⁾について自然談話資料、現日研(1997・以下『女職』とする)・現日研(2002・同じく『男職』とする)に基づいて、その談話内での機能を考察し、特に「あなた」「あんた」「おまえ」などのいわゆる対称代名詞と、名字・名前や役職・地位名を含む対称詞との機能上の違いについて考える。

対称詞の中には、小林(1997)で触れ、また高橋(2001)が整理して指摘したとおり、文頭またはそのごく近くで、提題助詞などは伴わずに用いられながら、同時に後続文の主題となっているものがある(後出の用例中◆を付したものがこれにあたる)。小論ではこれを含め、終助詞以外の助詞などを伴わずに発話中に現れる対称詞を「呼びかけ用法」として考察の対象とした。

『女職』『男職』には合計58例の対称代名詞(「あなた」「あんた」「きみ」「おまえ」)が出現するが、そのうち、このような「呼びかけ用法」は28例(48.3%)であった。また、もっともよく現れる対称詞「[名字]さん」については全233例中110例(47.2%)、「先生」「課長」などの役職名を含む対称詞については98例中41例(41.8%)と、いずれの場合も「呼びかけ用法」は現れた対称詞の半数近くを占めている。現れる率では比較的近い数字を示しているが、それぞれの対称詞はまったく同じような用いられ方をしているというわけではない。小論では、対称詞の出現の位置に着目して、その用いられかたの様相を見ていくことにする。

2. 対称詞の出現位置の持つ意味

発話順番⁽²⁾の冒頭に現れる対称詞が聞き手の注意を引きつけ、話者が発話を始めるという標識になっていることは常識的に考えうる。では、発話順番

の中間や末尾に呼びかけとして用いられる対称詞はどのような機能を持つのか。これらの中には省略しても文意は変わらないものも多いのである。

李(2000)は日本語母語話者が物語(過去に発生した出来事を雑談の中で報告すること)を開始・持続・再開・終了するための言語行動をそれぞれ整理し示した。それらの言語行動の多くは物語の内容とは直接には関係のない言辭で、聞き手にただ、物語の開始や持続、また終了と聞き手への発話順番の譲渡の意志などをのみ示すものである。仮に省略したとしても伝達する物語内容が損なわれることはない。対称詞の呼びかけは、提題を兼ねる場合の一部は別として、多くは省略しても伝達内容に大きな影響を与えないこと、相手の注意を引き、発話順番の取得や保持、譲渡の意志表示となりうるという点で、これらの言語行動と共通する点がある。高橋(2001)は、発話順番のやりとりや会話の展開にかかわる対称詞には「談話標識⁽³⁾」としての機能があるとする。

ところで、対称詞が発話順番のやりとりや、会話の展開に機能しているにしても、それがなぜ対称詞でなければならないのかという問題は残る。日本語においては対称詞、中でも特に対称代名詞は使いやすいものではない。実際に対称詞の出現率も多いとは言えない⁽⁴⁾。注意喚起や発話順番やりとりのマーカーであれば「ねえ」「ちょっと」「すみません」などの談話標識の機能を持った語を用いてもよいわけだし、実際にそのような例も多い。だが、後出の〔表〕によれば対称詞の20%近くは談話標識の直後に現れており、この場合などは対称詞は談話標識だけでは担えない機能を持つはずである。

田窪(1997:24・42)は日本語では、英語などとは違って固有名詞・定記述の文内対称詞としての使用が可能なこと⁽⁵⁾について、呼びかけあるいはそれに類する行為による聞き手認定が行われた結果であるとする。つまり、談話における呼びかけは、単に聞き手の注意喚起とか、発話の順番取りの合図として用いられるだけでなく、発話の相手を聞き手として認定し、相手にも認識させることにより、その呼びかけが活性化するセッションを開くというのである。この論は、固有名詞・定記述が文内対称詞になる場合について論じているので、聞き手認定の呼びかけは「対話セッションの初頭に対応する位

置」を持つとし、文内対称詞を持たない文の冒頭に現れる呼びかけを「注意をひくための呼びかけ」として聞き手認定の呼びかけとは区別している。しかし田窪自身が「呼びかけが発語行為として存在しない場合でも、認定作業は発語にともなって存在する」(24)と言っているとおり、談話における聞き手の認定は、文内対称詞がある場合だけに、文頭の対称詞の呼びかけだけが担うというわけではない。対称詞は引用中に現れるものなどを別にすれば、いかなる形で発話順番のいかなる位置に現れ、文内対称詞を伴うか否かにかかわらず、聞き手認定の機能を持つと考えられる。自然の談話では、相手の肩を叩く、目を見るというような非言語行動や「ねえ」「ちょっと」などの談話標識、疑問文・命令文などの文種や話題内容、また敬語の使用などによって聞き手を認定することができる。通常、発話の初頭で何らかの注意喚起によって聞き手は認定されるであろうが、疑問文などの場合は発話の終わりに疑問を表す助詞などによって再認定が行われると考えられる。対称詞によらず聞き手認定が行われるのはむしろ普通のことと言ってよい。その中であえて相手を直接に指示する対称詞はもっともダイレクトに聞き手を認定する働きを持つものと言えるだろう。この場合、発話順番冒頭の対称詞は注意喚起や発話の順番取得と聞き手認定の機能を合わせ持つであろうし、発話順番の途中、または末尾で、すでに認定された聞き手をさらに対称詞によって再認定することにもなんらかの意味があるはずである。また、それぞれの位置で実際にどのような対称詞が選ばれるかという点についてはそれぞれの語の持つ排他的な指示性の強さや待遇価値なども関わってくるはずである。これらについて以下に用例検討と考察を行う。

3. 出現の位置による対称詞の分類

3.1 使用の状況

実際に対称詞が発話のどの位置に現れているのかを、整理・例示する。『女職』『男職』に現れた対称代名詞についてはすべての例をあげ、*を付した。その他に固有名詞・役職を含む対称詞の例もあげた。なお、◆を付したのは、前述の通り、呼びかけと同時に提題を兼ねていると見られるものである。用

例中の「呼びかけ」部分には下線を施した。末尾の数字は資料内のレコード番号である。

A 単独で出現する。

- (1) a 1 「[名字 b] さーん」 (『女職』 5696～5699)
 - b 1 「はい」
 - a 2 「きょう、ケンコクカーイは何時ぐらいに行くの↑」
 - b 2 「あ、1時につくように行きます」 (↑は上昇アクセントの意)
- (2) * おまえね、おまえね (『女職』 205)
- (3) * おっまえ (『女職』 281)

B 発話順番の冒頭に出現し、後続する文・句がある。

- (4) [名字] さん、どうゆうポイントで一、報告すればいいんですかね↑ (『男職』 5924)
- (5) ◆ [名字] 課長、これ読んでないだろうとは思っけども一。 (『男職』 3051)
- (6) ◆ 先生ね、遠出なさったのにね一。(『女職』 4858)
- (7) * おまえ、それいいな一。(『男職』 2843)
- (8) * おまえ、そこまで杓子定規に考える必要は、何もね一よ一。 (『男職』 3195)
- (9) * あんた、自分が決めた日だからね一。(『男職』 8313)
- (10) * ◆ おまえ、絶対に誤解しているよ。(『女職』 287)
- (11) * ◆ おまえ、練習したの。(『女職』 3556)
- (12) * ◆ おまえきのう、[名字] さんに会った一↑ (『男職』 2833)

C 発話順番の頭部に発話標識(Discourse Markers.=DM)に引き続き出現する。

- (13) じゃー、[名字] 先生、お願いできますか。(『女職』 1497)
- (14) あっ、[名字の一部] ちゃん、あなたはすごい、あたしは尊敬しち

やう。(『女職』9555)

- (15) ◆ やっぱり [名字] さん、今日、あの一、子どもたちの、社会見学を、意識して、こう一身支度がびしっとしているから、ねっ。

(『女職』5041)

- (16) ◆ ねー、[名前の一部] にい(兄)、{応答・はい} 最近さー、メタル、メタルづいてるよね。(『男職』10653)

- (17) * そりゃーあなた、あなたにとってはだっつて、飯の種になる可能性があるんだから。(『男職』772)

- (18) * ◆ やっぱり、あなたまだわかってないんだわ、説明変数と非説明変数が。(『女職』1918)

- (19) * ◆ そーんなおまえ、そんなたくさん自分が10も20も持ってさー、フィルムにさー、300枚も400枚もたまってるわけじゃあるまいしさー、杓子定規に考えるなよ。(『男職』3193)

D 発話順番中の句、文などに引き続き出現し、さらに後続する文がある。

- (20) え、そうなのー↑ [名字] ちゃん、知らなかった。(『女職』7884)

- (21) 60単位ってゆうと、先生半分ですよー、卒業単位の。(『男職』935)

- (22) ◆ ここが60単位になったって話、先生聞いてます↑ (『男職』927)

- (23) * 参加の数、かつ、これあなた違うよ。(『女職』1896)

- (24) * 違うよあなた、黒いこんなのはいてんだよ。(『女職』1993)

- (25) * あれがおもしろいの、あなた、伝統の番組よ、あれっつて。

(『女職』2148)

- (26) * 言ってから朝一番ならわかるけど、あんた、言わないで朝一番なの、要領が悪いのよ、そうゆうのっつて。(『女職』4180)

- (27) * 誤解なのよ、あなた、お弁当買って来ることぐらい誰でもたいしたことないじゃん、ぜんぜん。(『女職』7319)

- (28) * まー、それこそおまえ、向こうの相手のチームにあげてもよし、転がしてもよしだよ。(『男職』2994)

- (29) * たとえば[取引会社名] みたいにおおまえ、1カ月600点あつて、そ

れをどうしますかってゆうんだったらそれは違うよー。

(『男職』 3194)

(30) * \$ # # # #、あ、おまえ [ゴルフ場名] か↑ (『男職』 8259)

(「\$ # # # #」は発話があったが不明瞭で聞き取れなかった)

(31) * いやいや、だって違うよ、食うのおまえー、かなわないよもー、
5回ぐらいあるんだから。(『男職』 8356)

(32) * ◆ はっきりいいな、あんた、はっきり。(『女職』 4159)

(33) * ◆ で [名字]、じゃ、おまえ 2年んとき、なにやってたのよ。

(『女職』 4367)

(34) * ◆ 少しだけって、おまえ全部やってねーのかよ、# # # # #はー。

(『男職』 5213)

E 発話順番の末尾に出現する。

(35) じつはちょっとあのとき、ちょっともめごとがあったのよね、[名字] ちゃん↑ (『女職』 7959)

(36) * だってあなたー。(『女職』 7868)

(37) * 引き画面じゃないと、あなた。(『女職』 2437)

(38) * じゅうたんの上、じゅうたん、じゅうたんからはみでてたんですよ、おまえ。(『女職』 6956)

(39) * 暴露する気、あんた。(『女職』 8769)

(40) * 打線すごいよー、おまえ。(『男職』 3036)

対称詞種別の出現位置数を次ページの [表] に示す。

3.2 分析と考察

[表]で見るとおり、単独で用いられるものも含め、発話順番冒頭で注意喚起・発話の順番取りの機能を負っていると考えられるのは固有名詞を含む対称詞「[名字] さん」「[名字] 役職名」「[名前 (やその一部)] 敬称 (さん・くん・ちゃん)」「ニックネーム」など(「[名字] さん」「[名字] 役職名」以外

[表]

(上段は使用例数・下段は合計数に対する%)

対 称 詞	A 単独	B 冒頭	C DM後	D 中間	E 末尾	合計
あなた・あんた	0	1	2	6	3	12
	0.0	8.3	16.7	50.0	25.0	100.0
おまえ	2	5	1	6	2	16
	12.5	31.3	6.3	37.5	12.5	100.0
[名字] さん	20	55	16	14	5	110
	18.1	50.0	14.5	12.7	4.5	100.0
[名字] 役職名	3	9	3	2	0	17
	17.6	52.9	17.6	11.8	0.0	100.0
そ の 他 (固有名詞含)	2	17	11	4	9	43
	4.7	39.5	25.6	9.3	20.9	100.0
役 職 名	0	10	6	7	1	24
	0.0	41.7	25.0	29.2	4.2	100.0
合 計	27	97	39	39	20	222
	12.2	43.4	17.6	17.6	9.0	100.0

はいずれも固有名詞を含む対称詞として「その他」に分類)である。その場にいる複数の中から、特定の一人を聞き手として呼びかける場合などを考えればわかるように、単に相手が「聞き手」であることをのみ示す対称代名詞では、人を特定することはできないのであるから、これは当然と言えよう。もちろん、肩をたたくなどの行為をとまったり、その場に話者と相手の二人しかいないという場合には、発話冒頭の対称代名詞による呼びかけは成立しうるが、実際の例は少ない。

Aにおいて(1)は典型的な用例である。単独で発話を構成し、この語によって発話の順番を取得し、会話の意志を相手に示して相手の注意を喚起するとともに、聞き手認定をしている。(2)は発話順番取得のために用いられ、(3)は直前の相手の発話に対して、否定的態度を表明した呼びかけである。なお、(2)(3)は同一の話し手・聞き手によるもので、この場ではこの2人だけで会話が進行しており、呼びかけられた相手に聞き手となる用意があるという状況により対称代名詞の呼びかけが成立している。対称代名詞の単独呼びかけ

は全資料中この2語だけであった。

Bの発話順番冒頭に現れる対称詞については、いずれも発話の順番を取得する談話標識としての機能、相手の注意を喚起する機能、同時に相手を聞き手として認定し呼びかけセッションを活性化する機能を果たしていると考えられる。ただし、(4)(11)(12)は疑問文であり、(7)(8)は「それ」「そこ」などで、話し手でなく聞き手の側に話題があるのが明示される。また(6)は敬語表現を含むゆえに、対称詞によって聞き手認定が仮に行われなくても聞き手は認定される。すなわち、これらの対称詞は省略が可能である。省略が可能などころであえて用いられる対称詞は固有名詞や役職名を用いるものも含め、より強く聞き手を認定したいという意図の現れと見ることができよう。なお、Aの(2)(3)も含め、発話冒頭に現れる対称代名詞は「おまえ」が圧倒的に多く、「あなた」は皆無で「あんた」は(9)の1例のみである。

「あなた・あんた」が特にそうであるが、対称代名詞は、発話標識の直後に用いられるものも含め、発話の冒頭ではなく、中間で用いられる傾向が強い。これらの発話では談話標識となる語や、対称詞以前の文・句によって、すでに注意喚起や発話の順番取りは行われており、聞き手認定もとりあえず行われていると言える。それゆえに、単に「聞き手」を示す対称代名詞の使用も可能ということになる。

Cでは対称詞は談話標識となる語の直後に現れる。注意喚起や発話の順番確保の意図をこれらの語とともに示しつつ、対称詞自体は聞き手を認定し、相手にも認識させる役割を果たしている。またCでは(15)(16)(18)(19)のように呼びかけが提題を兼ねている例、(14)(17)のように、いったん呼びかけた後さらに文内対称詞による言及が繰り返されている例が目立つ。これらは聞き手を認定するとともに、発話内容が聞き手自身に関することであるという表示にもなっている。高橋(2001)は対称詞は発話順番の頭部ないしそれに準じる位置にあるほど、「主題性」が高くなるというが、実際の例にそれが現れていると見ることができる。聞き手認定によって開かれた呼びかけセッションの効力は発話順番が長くなればなるほど希薄化すると考えられる。セッションを保持していくためには、効力が薄れぬ初期に聞き手を再認定し、そ

れを繰り返していく必要がある。

CやDのように、発話順番の途中に対称詞が現れ、中でも、それが文意から独立して、省略も可能な場合（Dにあげた例に関してはほとんどが当てはまる）に考えられる対称詞の機能は、第一に発話順番を保持し続けるために、なんらかの意図を聞き手に伝えるということであろう。李（2001：202～219）は物語の持続のための言語行動を「接続表示」「注目要求」「時間かせぎ」の3つに分類した。このうち、物語を受け手に注目してもらい、受け手側の行動による中断を防ぐとされる「注目要求⁽⁶⁾」については対称詞にもあてはまるもののように思われる。さらに、ここであえて用いられる対称詞は、前述のBと同様に聞き手を再認定する機能を担っていると考えられる。

C・Dでは、(18)(19)(23)(24)(26)(27)(29)(31)のように相手の言辞を否定する「違う」「誤解だ」などという語とともに用いられた例が多い。(32)は典型的な命令文、(34)は形式は疑問文だが、聞き手への非難を込めた言い方で、いずれも相手に関する否定的判断を強く主張している。

(24)(25)(27)(31)などは、まず生の形で感情を吐露するような判断を行い、いわば引っ張り込むような形でセッションを開き、次に聞き手を直接示す対称詞で「注目要求」をすることにより、前出の話題が聞き手自身にかかわるものであることを示して、先の判断を強化したり、判断の理由などを説明する形態になっている。いったん開いたセッションをさらに開き直すのは聞き手を再度認定し、いわば念押しをすることになる。そのようにして聞き手に伝えるのは聞き手に対する否定や批判であるから、この聞き手認定は批判や非難の意図を強める働きをしていることにもなる。この場合固有名詞や役職名でなく対称代名詞が使われることがきわめて多く、C・Dに分類された15例の対称代名詞のうち、11例はこのようなものである。必ずしも必要のないところで、あえてセッションを開き直すことと、そこに、直示性の強い「あなた・あんた」や「おまえ」を用いることの二重の働きによって、このような効果がもたらされている。このような認定のしかたを小林(2001)では「排他的指示性の強さ」としたのである。

なお、「おまえ」については否定・批判の発話でも使われるが、(7)(40)の

ように単純な賞賛や感想とともに用いられた例もあり、また、前述のとおり発話の冒頭にたつ例が多いことから、「あなた・あんた」とは異なる機能を含んで使われているものと思われる。たとえば、相手との距離を縮める、ポジティブポライトネス・ストラテジーの意図から、この語による聞き手の再認定が行われる場合があるのではないか。人を「おまえ」と呼ぶことへの批判がしばしば行われるのにもかかわらず、恋人や家族などの親しい関係でこの語がなかなか廃れずに使われ続けているという状況があるが、これは、このような「おまえ」の二面性の反映と見ることができる。

発話順番の中間に「[名字]さん」「先生」などが現れることはあるが、(20)(21)(22)のような例で、特に批判や非難の意図が見られるわけではない。しかし、たとえば(22)と同じ意味で

(22')ここが60単位になったって話、聞いてます(か)↑

(22'')ここが60単位になったって話、お聞きになってます↑

と、疑問形や敬語で聞き手の再認定を行う場合と比較してみると、対称詞による聞き手再認定の直接的な強さを感じることができるだろう。

最後にEの発話順番末尾に対称詞が現れる場合は、この呼びかけで、最後にもう一度聞き手を認定し、聞き手の応答を期待することによって発話のセッションを閉じ、発話順番を相手に譲渡することになると考えられる。[表]によれば、「あなた・あんた」「おまえ」では一定の割合で末尾に現れた例が見られるが、「[名字]さん」や「[名字] 役職名」「役職名」が末尾で使われることは他の位置で使われることに比して少ない。発話順番末尾で、必ずしも必要とは言えない文脈で使われる呼びかけは念押しということになり、相手の応答なり反応なりを強く期待することになる。そのような聞き手認定の強さは、「名字」や「役職」では避けられ、対称代名詞ではあえて避けられることは少ないということになる。これは発話順番中途のC・Dのような例と共通する傾向と言える。

4. まとめ

対称詞が発話順番それぞれの位置によって談話展開のマーカーとしての役割を果たしていると同時に、聞き手を指示認定していることを、用例によって確認した。この場合の聞き手の認定は人を直接指すことによって行われるから、他の認定よりはダイレクトで強いものと言える。発話順番冒頭の対称詞はいうまでもなく注意喚起の呼びかけを兼ね、文頭の談話標識直後に現れるものは提題を兼ね主題性が強いという傾向がある。また、すでに聞き手認定が行われ、文意・文脈上では必ずしも再度の呼びかけの必要がない発話順番中間や末尾で、あらためて対称詞による呼びかけによって聞き手認定を行うということが、きわめて強い排他的指示性を生み、話し手の強い判断や聞き手への批判・非難などを表す発話効果を上げることが見られる。なお、この場合「名字」さんや役職名よりも対称代名詞が使われる。対称代名詞自体は発話の冒頭には使われにくいという性質を本来持つが、このように発話順番の中間での使用が行われる傾向は、人を固有の呼び名ではなく直接聞き手として示す直示性によるのであろうと考えられる。そして対称代名詞が使われることが、聞き手への批判・非難等の効果をいっそう強める効果を示していると言えよう。

注

- (1) 石井・小沼(1998)による分類。「呼びかけ用法」は「聞き手を独立的に呼んだ場合」とされ、「言及用法」(「聞き手を非独立的な文の成分として呼んだ場合」)に対する。これはまた、鈴木(1973)の「呼格的用法」「代名詞的用法」の区分にほぼ一致すると見てよいかと考えられる。
- (2) 李(2000)による。「発話順番」とは「一人の会話参加者が話し始めてから話し続けることをやめるまでを指す」と定義されている。
- (3) Discourse Markers. 発話の一般的な導入機能として、先行発話との分離と新しい区切りの発話の始まりを示す。日本語における典型的な談話標識としては「あのー」「そのー」「えーと」、「はい」「うん」「やっぱり」「だって」「じゃ」などがあげられる。
- (4) 小林(2002)によれば、職場の自然談話資料総レコード数は『男職』11054、『女職』11233

- であったが、そこに現れる対称代名詞は『男職』27 (0.244%) 『女職』31 (0.276%)、対称代名詞以外の対称詞は『男職』261 (2.36%) 『女職』158 (1.41%) であった。
- (5) 固有名詞・定記述とは「[名字] さん」「課長」「先生」などのような談話領域の中でその語で呼ばれる特定の人物を指す語のこと。このような語は「田中さん、田中さんはどちらにします」(下線は小林による)のように文内対称詞としての使用が可能であるとされる。
- (6) 李は「注目要求」の例として「ほら」「あのね」「あのさ」「～ね」「～さ」などをあげている。(207)

参考・引用文献

- 石井正彦・小沼悦(1998)「テレビ放送における呼称」『日本語学』17-9
- 現日研(1997)『女性のことば・職場編』現代日本語研究会・ひつじ書房
- 現日研(2002)『男性のことば・職場編』現代日本語研究会・ひつじ書房
- 小林美恵子(1997)「自称・対称詞は中性化するか」『女性のことば・職場編』現代日本語研究会・ひつじ書房
- 小林美恵子(2001)「排他的指示機能からみた対称詞」『ことば』22号 現代日本語研究会
- 小林美恵子(2002)「職場で使われる『呼称』」『男性のことば・職場編』現代日本語研究会・ひつじ書房
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書
- 高橋圭子(2001)「会話における対称詞の機能」『社会言語科学会第8回研究大会予稿集』
- 田窪行則(1997)「日本語の人称表現」『視点と言語行動』くろしお出版
- 李麗燕(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版

(こばやし みえこ)